

# 歯朶細工

## ● 歯朶細工の歴史

歯朶細工は、岡部町内谷に住んでいた杉山清十郎さん（一八二二〜一八八二）が、發明しました。清十郎さんは、静岡市に生まれ、岡部の杉山忠右衛門さんの婿養子となりました。優れた才能の持ち主で特に書画彫刻などを好み、その実力は非常にたけていました。嘉永年間（一八四八〜一八五四）に山野に多く自生するウラジロに着目しこれを材料とした籠や器などを考案しました。これが歯朶細工のおこりです。その後、多くの職人を養成し、岡部の産業となるまでに発展させました。歯朶細工は明治時代（一八六八〜一九一

日本の特産品のひとつに数えられ、明治十八年には、中国やアメリカに輸出されるようになりました。

志太郎誌によれば、大正二年における歯朶細工の製造数は五万七千個で、うち二万五千個が海外に輸出されていました。また、製造戸数と職人数は静岡県全体で十八戸で六十九人あり、そのうち十五戸四十人を岡部がしていました。

初代静岡県令・大迫貞清は、清十郎さんの功績を称えて、「裏白」という称号をおくりました。また、岡部町内谷の光泰寺には、小松原英太郎静岡県知事が題字を書いたという清十郎さんの功績を記した記念碑が、明治三十年に建立されました。

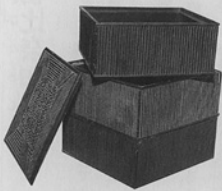
明治時代から昭和時代（一九二六〜一九八九）初期にかけて最盛を誇った歯朶細工の製造も昭和三十年代に入ると、原料の不足や需要の減少、後継者難が重なって、急速に衰退

し、昭和四十年代前半には姿を消してしまいました。

## ● 歯朶細工の種類

歯朶細工は、歯朶の種類により、大別して蟹歯朶と鷹歯朶の二種類があり、前者は籠などの編み物系統に使われ、後者は盆や膳などの板物系統に使われました。

編み物系統は、明治十七年頃から作られ、果物籠、盛籠、花籠、生け花籠、くず籠、衣



歯朶細工（重箱）

類籠、茶碗籠、炭籠などがあり、販路は静岡・東京・名古屋・金沢を中心に福島・仙台・水戸・群馬などにも出荷されていました。板物系統には、盆、菓子器、重箱、硯箱、筆立て、拭拭し、写真押し、ハガキ入れなどがあり、主に輸出に向けられました。

## ● 歯朶細工の製造工程

歯朶は、自然に枯死したものを採取し、十日ほど日光にさらした後、火にあぶりながら曲がりを直します。

籠などの編み物にする場合は、柔軟に曲がりやすくするため炭酸ソーダを入れた釜で煮沸してから材料とします。色を染めるときも染料に浸して煮沸します。

盆などの板物の場合は、小刀で茎の腹に接面をつくり、その茎に特殊なキリで穴をあけ、そこに針金を通して固定し、ニカワで接着します。